

S O U

奏

Summer 2021



CONTENTS

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------------|
| 1 対談 堤剛(チェリスト)×望月京(作曲家) | 11 楽器工房探訪 vol.1 弦楽器工房Liuteria-TAKADA |
| 5 ベートーヴェンと弦楽四重奏 | 13 世界のアンサンブル事情 vol.1 A. ツインガコフ(ドラム奏者) |
| 7 ピアノ三重奏・四重奏の世界 | 15 世界の民族楽器 音の出し方<似た者同士> vol.1 |
| 9 室内楽あるある vol.1 小笹文音(アイズリ・カルテット) | 17 イラスト・コミック 演奏旅行の楽しみ |

VOL. 55



第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
第1部門(弦楽四重奏曲)課題曲
望月さん新作「ボイズ・アゲイン(Boids Again)」



対談

堤 剛 (チェリスト) × 望月 京 (作曲家)

インタビュー 山田治生 (音楽評論家) 撮影 平館 平

Tsuyoshi Tsutsumi × Misato Mochizuki Interview

作曲家・望月京さんとチェリストで大阪国際室内楽コンクール審査委員長の堤剛さんとの対談。
望月さんは、第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの第1部門(弦楽四重奏曲)の課題曲として
「ボイズ・アゲイン(Boids Again)」という新作を作曲したばかり

(注:コンクールの中止により、2022年2月、ザ・フェニックスホールでクアルテット・エクセルシオが世界初演する予定)。

新作の意図は? 作曲家の望む演奏とは?

二人の音楽家が、新作から、弦楽四重奏、ベートーヴェン、音楽教育、コロナ禍までを語り合った。

——まず、大阪国際室内楽コンクール&フェスタから望月京さんへの課題曲委嘱の経緯を教えてください。

堤 室内楽には、音楽作りの根本を学び、作品の構造を知ることができるという特性があり、それゆえに、岩淵龍太郎先生がこのコンクールを始めることで、室内楽を日本に根付かせようとしたのだと思います。弦楽四重奏にはまだまだ演奏の可能性があり、その道を切り拓いていくことによって、新しい歴史が開けていくと思いますので、10回目のコンクールを記念して、望月京さんに新作をお願いすることにしました。

——望月さんにとって弦楽四重奏曲とは?

望月 過去の偉大な遺産の数々やその来歴を踏まえ、その上に今、自分が改めて何をいえるのかと考えると、なかなか気軽には手を出せないジャンルです。最初の弦楽四重奏曲の作曲も30代半ばと遅いほうでしたが、2曲めはさらにその12年後となりました。

堤 弦楽四重奏の素晴らしさは、自分を持ちながら、他者を意識することに違いありません。ヨーロッパ的な、個人を大事にしながらく全体で作り上げるという伝統があるように思います。

——新作の委嘱を受けて、どうしようと考えられましたか?

望月 私が最近ずっと興味を持ち、作品の発想源としているのは脳の働きです。2017年から断続的に、脳の機能を反映した弦楽四重奏曲のシリーズ『ブレインズ』を書いていますが、

今回の作品はその3曲めにあたります。

数年前、脳研究者の池谷裕一先生と対談する機会があり、その際に「人の脳にはリズムに反応する回路が生まれつきあるから、音楽と人間とは不可分である。言語は音楽から生まれたという説もある」というお話を伺いました。そこで、音楽から生まれたと言われる言語によって考察された脳の働きを、音楽化してみたらどうだろう?と考えたのが『ブレインズ・シリーズ』作曲のきっかけです。脳の機能同様、外部の刺激もトリコンでの自発性が演奏の肝となるので、コンクール向きではないかとも考えました。

——コンクールにおける新作の役割についてどうお考えですか?

堤 バリでロストロポヴィチ国際チェロ・コンクールの審査員をしたことがあります。第2次予選では必ず句の作曲家の新作がありました。あるとき、サーリアホさんのとても難しい曲があり、審査員の一人が「こんなに難しい曲どうなんだろう」と意見していましたが、ロストロポヴィチ先生は「チェリストへの新しい課題によってチェロのレパートリーの広がりになるので大事なのだ」とおっしゃっていました。新作に新しい可能性を求めるのは重要なことです。

——新作『ボイズ・アゲイン』についてお話ししてください。

望月 『ブレインズ・シリーズ』は現在のところ4曲、計45分ほどが完成しています。1曲目の『ブレインズ』は脳の「模倣、共感、自己認識」などの機能を発想源とした10分ほどの曲、2曲

めの『ボイズ』は魚の群れの動きのしくみを援用し、クロナス・クアルテットの『50フォー・ザ・フューチャー』というプロジェクトのために書きました。『ボイズ・アゲイン』はその続きで鳥の群れの動きのしくみを援用、4曲めの『イン・サイド』はヨーロッパアン・コンサート・ホール・オーガニゼーションの若い演奏家を応援するプロジェクトのために作曲。偶然ですが、若手演奏家たちに向けた曲集のようになっていきます。

「ボイズ(Boids)」とは鳥もどきのことです。鳥や魚の群れ全体の動きは複雑ながら美しく整然としていますが、それはシンプルな原則に基づき規則性と自由さのバランスによって作られており、室内楽の極意にも通じるのではないかと考えました。曲は群れの情景の表現ではなく、その仕組みを援用しています。鳥それぞれが群れの動きに合わせてようと行動しているのではなく、規則に基づく自由な動きが結果として美しい群れを形成していることをヒントに、演奏者の方々にも各楽器の動きと四重奏全体の音響つくりを考えていただければと思います。

堤 望月さんの新作、技術的にもアンサンブル的にもたいへん難しそうですが、うまくいけば、望月さんの望むような、いろいろな形で鳥が現れる、素晴らしい作品になるのでしょうか。

——新作の演奏上のポイントを教えてください。

望月 この作品の場合、楽譜に書かれたとおり正確に弾くことが必ずしも重要ではありません。噛み合わない拍やリズムで書かれている部分も多く、楽譜全体を見れば、縦の線を合わせるような演奏が求められているのではないことはわかるかと思えます。何が守るべきポイント

新作を演奏するとき、イメージーションがすごく大事

ントで、どのような自由さが音楽を活性化させるのかを読みとっていただけだと思います。

——堤さんはこれまでに数多くの新作を初演されましたが、どういうアプローチで取り組んでこられましたか？

堤 新作を演奏するとき、イメージーションがすごく大事だと思います。自身の新作へのアプローチでは、まず楽譜を読んでみて、指揮者の岩城宏之先生が『楽譜の風景』とおっしゃっていたのですが、その風景を見るんです。そうすると作品が全体として訴えてくるものが現れます。それから細かいことを考えます。例えば、望月さんの新作のチェロのすごく難しいパッセージでも、全体の効果としてのメッセージを受け取り、そのためにどういうことをするかを考える。技術とは、とんでもなく速く弾くことではなく、音楽をどう表すかなのです。

——2020年はベートーヴェン生誕250周年でしたが、弦楽四重奏の分野でも彼の足跡は別格です。



——堤さんは、本コンクールだけでなく、サントリーホール室内楽アカデミーのディレクターを務めるなど、教育の現場で数多くに若い音楽家と接してられますが、今の若者をどうように見られますか？

堤 今の若い方は、弦楽四重奏にしても真正面から向き合っている。技術的にもすごい。最近のグループは、自分たちの音やイメージを持っている、頼もしく思います。昔、ブダペストのリスト音楽院での作曲家のレオ・ヴァイナーの室内楽クラスから素晴らしい音楽家がたくさん輩出されました。シュタルケル先生も門下生の一人でした(注:その他、ドラティ、シヨルティ、ヴァルガなど)。そこでは、広い意味での音楽が教えられていたと聞きます。そのように、音楽を広い意味からつかんでほしい、体や脳をどう使うかなど音楽を全体からつかんでほしい、と思います。サントリーホール室内楽アカデミーを始めました。

——昨年来のコロナ禍でどのようなことを考えられましたか？

望月 演奏会ができず、動画配信などが台頭し、その可能性や至便性に心動かされつつも、反比例的に生演奏の意味をますます強く考えています。音楽の一番重要なことは、空気の震えの共有だと思っております。会場の皆でそれを体感し、深く共鳴する体験は、動画ではなかなか得難いものです。

堤 確かに配信では、音色がわからず、タイムラグもあります。チェロが人の声が一番近いのは、響きゆえです。チェロの発する振動が直接伝わ

堤 ベートーヴェンは、最後の弦楽四重奏作品群がすごいですね。それでも彼は、最後の作品群で、逆に、『もつとできるんじゃないか』というメッセージを後に続く者に与えているような気がします。作品18や『ラズモフスキー』は、それで完結していますが、最後の作品群は未来の音楽への可能性を示してくれているように思います。

望月 若い時にはドイツ的な構造よりもフランス音楽の響きの美しさに惹かれ、ベートーヴェンに対する反発がありました。でも、堤先生がおっしゃるように、ベートーヴェンの多くの作品の中には、未来を予見するような、今聞いても色褪せない斬新な創意と、それがもたらすサプライズがあります。限られた要素を徹底的に展開してゆくドイツ音楽的な構造をもちながら、時に「なぜそうなる?!」と言いたくなる意表をついた激烈な要素が出現する。それがベートーヴェンの不滅の魅力と個性でしょう。

フランス音楽の、さまざまな音や音色を混ぜてつくる独特の響きの妙には、さらに直接的に現代の音楽に通じる部分があります。多くの現代の音楽において、音響自体が作品の主要モチーフやテーマとなる重要な要素だからです。

堤 実は、一番好きな作品群はインプレッションニスト(印象派)なのです。フランス的な感性、音色、音の響き、素晴らしいと思います。例えば、プーランクのチェロ・ソナタやドビュッシーのチェロ・ソナタですね。

——望月さんは、作曲する際に、聴衆のことを意識されますか？

望月 心に触れるから、人の声に近いと感じるのです。イリノイ大学で知り合った、脳の研究をしている新井紀子先生から、音楽と脳の関連の話が聞きましたが、私はチェロを教えるときに『身体の動きはすべて脳から来ている』とよく言います。チェロを手だけで弾きがちですが、脳を使って、体の動きをオーガナイズするのが大切という意味です。先ほど述べたブダペストのクラスでもそういうことを教えていたそうですね。

——長い時間、ありがとうございました。



堤 剛 (チェリスト) Tsuyoshi Tsutsumi

桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ齋藤秀雄に師事。1961年アメリカ・インディアナ大学に留学、ヤーン・シュタルケルに師事。63年ミュンヘン国際コンクール第2位、カザルス国際コンクール第1位。1993年日本藝術院賞他、多数受賞。2009年秋の紫綬褒章を受章。同年、天皇陛下御在位二十年記念式典にて御前演奏を行った。13年、文化功労者に選出。アメリカ・イリノイ大学教授(1984~1988)、インディアナ大学教授(1988~2006)、桐朋学園大学学長(2004~13)を歴任。現在、桐朋学園大学特命教授、サントリー芸術財団代表理事・サントリーホール館長、霧島国際音楽祭音楽監督、韓国国立芸術大学客員教授、日本チェロ協会会長、日本演奏連盟理事長、日本藝術院会員。

望月 京 (作曲家) Misato Mochizuki

さまざまな領域への関心からもたらされる着想や、繊細さとダイナミズム、多彩な音色とバランス感覚に優れたユニークな作風が内外で注目を集め、オペラ『パン屋大襲撃』、管弦楽曲《むすびII》(プザンソン国際指揮者コンクール課題曲)など、多くの委嘱作品がザルツブルク音楽祭、ヴェネツィア・ビエンナーレ、パリの秋芸術祭、リンカーンセンター・フェスティバル、サントリーホールなどで演奏される。芥川作曲賞、出光音楽賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、尾高賞、ハイデルベルク女性芸術家賞ほか受賞。国際作曲セミナーや、コレージュ・ド・フランス、ニューヨーク・コロニア大学、アムステルダム音楽院等で招待講師を務め、現在明治学院大学教授、東京芸術大学特別教授。2019年、日本経済新聞連載コラムをまとめたエッセイ集『作曲家が語る音楽と日常〜パリと日本を行き来して〜』を上梓。

関連公演情報

第10回 大阪国際室内楽コンクール 委嘱作品が聴ける!

クアルテット・エクセルシオ with 後藤彩子(ヴァイオリン)

2022 2/12(土) 14:00開演
あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

〈料金〉全席指定
一般 ¥4,000
フェニックス友の会 ¥3,600
学生 ¥1,500

〈曲目〉
望月京: Boids(2018)
Boids again(2020) ※世界初演
メンデルスゾーン: 弦楽五重奏曲第2番 op.87 ほか

〈チケット取扱〉ザ・フェニックスホールチケットセンター
06-6363-7999 ほか

〈お問合せ〉公益財団法人日本室内楽振興財団
06-6947-2184



公演情報はこちら

堤 私は、アメリカ留学して、インディアナ大学でシュタルケル先生に学びました。アメリカでは、総合大学のなかで音楽を教えていて、音楽学生以外への音楽鑑賞にも力を入れている。音楽学生も他の科目を取って、トータル・ミュージシャンができる。音楽家の位置づけや使命など、アメリカの大学で音楽の広がりを感じました。

望月 私は高校から15年以上、音楽学校で教育を受け、今は同じくらい長く総合大学で教えています。音楽学校で学ぶのは技術的なことが主なので、意識が自分と音楽との関係に留まりがちですが、音楽は「目的」であると同時に、自分と他者をつなぐメディア(媒体)であることに遅まきながら気づきました。作曲家はそれをもつと意識し、音楽を通して自分が表明すべきだと思っています。私の作品で、音楽外の要素から発想されたものが多いのは、そうした意識の表れかもしれません。

音楽の一番重要なことは空気の震えの共有だと思う



ベートーヴェンについて書く前に、一旦、彼より前の話をするを許してほしい。弦楽四重奏は、一般的には古典派以降の編成だと思われているが、現存する最古の作品はバロック時代のアレッサンドロ・スカッラッティ(1660~1725)による4声のソナタ(1725)だという。バロック時代といえばチェンバロとヴィオラ・ダ・ガンバ(現代に置き換えれば、ピアノとベース)などで奏でられる「通奏低音」が基盤となるハーモニーとリズムを生み出し、そこに別の楽器や歌によるメロディが重なるという形態の音楽が一般的だった。けれども前述したA.スカッラッティ(鍵盤楽器のためのソナタで有名なドメニコ・スカッラッティの父)は、通奏低音なしで成り立つ4声のソナタ(=四重奏)を新たな試みとして作曲。これが後の弦楽四重奏曲の原型となったというわけだ。

ただし、バロック時代が終わってもしばらくの間は、ディベルティメント(嬉遊曲)やセレナーデ(夜曲)といった軽めのスタイルの音楽が弦楽四重奏で演奏されていた。これを現在のように、交響曲と並ぶシリアスな曲種へと変えてしまったのが、ベートーヴェンの師匠にあたるフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)だった。

とりわけ歴史的に重要な作品とされているのは、ハイドン自身が「全く新しい特別な方法で作曲」と主張している、6つの弦楽四重奏曲 Op.33(1781)―いわゆる《ロシア四重奏曲》だ。旋律を歌うというよりは、短いモチーフを積み重ね、繰り返していく手法は、のちに「主題労作 thematische Arbeit」(ベートーヴェンの《運命》で「ジャジャジャー」が折り重なっていく、あれと同じ作曲技法だ!)と呼ばれるようになっていく。そして、《ロシア四重奏曲》に衝撃を受けたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)は、《ハイドン四重奏曲》(1782~85)でこの技法を取り入れた。ベートーヴェンも、この流れを汲むところから創作を始めようとしたのだが……。

【初期】

4つの楽器を、限りなく対等に扱う

20代に入ってから故郷ボンを離れてウィーンに拠点を移したベートーヴェンは、すぐには弦楽四重奏曲に手を付けなかった。代わりに弦楽三重奏曲や五重奏曲、なんなら自身の演奏するピアノを加えた編成のための室内楽を作曲していく。おそらくは師匠ハイドンと憧れのモーツァルトが傑作を遺した四重奏からは一旦、距離を置きたかったのだろう。20代後半になっていた1798年の夏頃からやっと弦楽四重奏曲に本格的に取り組むようになり、およそ2年かけて6つの作品―弦楽四重奏曲 Op.18(第1~6番/1798~1800)を書き上げた。

これらの作品の特徴は、演奏者の立場から考えると掴みやすい。6曲とも前述したような主題労作によって作曲されているのだが、短い音形の積み重ねられていく音楽を、

単に「主旋律」と「伴奏」という形で音楽を理解しては、息の長い音楽を紡いでいくことが出来ないのだ。しかも主題は(均等でこそないものの)すべての楽器に割り振られていくため、四重奏団の4人全員に拮抗した実力がないと、どうしてもアンバランスな音楽になってしまう。4つの楽器を活躍させるという観点では、ベートーヴェンはこれら初期の四重奏曲で、既にハイドンとモーツァルトを超えてしまったといえる。



Haydn

Mozart

ベートーヴェンと弦楽四重奏曲

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の人生において、16曲の弦楽四重奏はどのような存在意義を持つているのか？

小室敬幸(音楽ライター)

【中期】

枠にとらわれないスケールの大きい音楽

Op.18(第1~6番)の完成からおよそ2年―1802年10月、聴覚障害に悩まされていたベートーヴェンはウィーン郊外のハイリゲンシュタットで遺書(実態は遺言状)をしたためる。芸術の偉大さを讃えることで苦悩を乗り越えようとしたベートーヴェンは腹をくくり、1803年からこれまでの常識を打ち壊した革命的な作品として、交響曲第3番《英雄》(1803)やピアノ・ソナタ第23番《熱情》(1804~05)といった、誰もがベートーヴェンらしいとイメージするような、非常にドラマチックな音楽が立て続けに書かれていく。

この流れに位置するのが、3つの弦楽四重奏曲 Op.59《ラズモフスキー四重奏曲》(第7~9番/1806)、第10番 Op.74《ヘー》(1809)、第11番 Op.95《セリオン》(1810~11)の5作品である。4つの楽器が拮抗する書法はそのままに、弦楽四重奏とい

う枠にとらわれないスケールの大きな音楽が特徴的だ。もう少し具体的にいえば、第1楽章と第4楽章がソナタ形式になっているのは当然として、第2~3楽章もソナタ形式になっていたり、そうではない場合にはカノンやフーガといった対位的な書法が徹底されていたりと、全ての楽章の密度が高められた。



ハイリゲンシュタットのベートーヴェンの家

Ludwig van Beethoven String Quartet

【後期】

詩的な要素

第11番《セリオン》の完成から13年後―あの交響曲第9番《合唱付き》を書き上げた後に、ベートーヴェンは久しぶりに弦楽四重奏の世界へと舞い戻る。この頃、秘書を務めていたヴァイオリニストのカール・ホルツに、ベートーヴェンは「今日、古い形式(ソナタ、フーガ、変奏曲)には、真に詩的な要素がなければいけない」と語ったという。これは、既存の形式をなぞるのではなく、意味ありげな(詩的な)要素を挿入することで、新しい音楽を生み出そうという宣言だった。

弦楽四重奏に関しては、言うならば拡張路線がとられており、番号順ではなく作曲順に作品を並べると傾向がみえてくる。第12番変ホ長調 Op.127は全4楽章、第15番イ短調 Op.132は全5楽章、第13番変口長調 Op.130は全6楽章、第14番嬰ハ短調 Op.131は全7楽章と、楽章数がだんだん増えていき、第16番

へ長調 Op.135で再び全4楽章へと戻った。精神性が追求された緩徐楽章に重きを置いているのも、共通する特徴といえるだろう(ただし、第13番と第16番は少し扱いが軽い)。

第13番の第6楽章として書いた「大フーガ」は不評だったため作品として独立。代わりの終楽章を1826年の10~11月にかけて作曲したが、これが最後に完成させた作品となり、4ヶ月後に楽聖はこの世を去った。結果的にベートーヴェンが最期まで保守的にならずに創作を続けた証明となったのが、これら後期の5作品となった。



ピアノ三重奏、 四重奏の世界

ピアノと弦楽器が絡み合うピアノ三重奏や四重奏は、室内楽の代表的なジャンルの一つである。

ここでは個性豊かな両形態の歴史と魅力をご紹介します。

柴田克彦（音楽ライター）

ピアノの発展に伴われて 隆盛を極めた ピアノ入りの室内楽

第10回大阪国際室内楽コンクール（以下コンクールと表記）の第2部門ではピアノ三重奏と四重奏がテーマとなっていた。各々ピアノ3台、4台の演奏ではなく、ピアノ三重奏はピアノ+ヴァイオリン+チェロ、四重奏はそれにヴィオラを加えた形を意味している。中には管楽器を交えた例もあるが、ここでは歴史上主体をなす弦楽器とピアノの編成に絞って見ていこう。

ピアノが入る室内楽の歴史は、楽器自体の発展と連動している。そもそもピアノは、1709年イタリアの楽器修

理人バルトロメオ・クリストフォリによって発明された。当初は響きも弱く音域も狭かったが、徐々に改良されていく。1760年代からこの楽器のための作品が作られるようになり、やがてハイドンのピアノ三重奏曲が生まれる。1780年代には作品も増加。モーツアルトの四重奏曲が書かれ、この形態も認知されていく。1790年代から1800年代には、鍵盤数が増えて響きも豊かになるなど俄然進化。ペーターヴェンはその恩恵を生かした。1820年代には現在のグランド・ピアノの根源となる構造が開発され、1853年スタインウェイ社が現型に近い楽器の製作を始めた。この流れに即してピアノ付きの室内楽曲も多彩さやスケールを増し、19世紀には五重奏曲も登場。ブラームス等のロマン派の時代から現代に至るまで名作が多数世に出ることとなった。

ソロとアンサンブルの 妙味を併せ持った ピアノ三重奏

ピアノ三重奏は、2つの旋律楽器と通奏低音の3声部からなるバロック時代の「トリオ・ソナタ」から派生したとみられている。そして古典派の時代

フェッツ（ヴァイオリン）らによる通称「百万ドル・トリオ」のようなスター共演も起こり得る。一方では、かつてのボザール・トリオに代表される常設グループの練り上げられたアンサンブルも深い感銘を与えてくれる。ピアノ三重奏は、ある意味万能の形態といえるだろう。

多彩な美感で魅了する ピアノ四重奏

ピアノ四重奏の始まりは三重奏よりも若干遅く、ハイドンには作品がない。だが最初から名作が生み出された。1785年に完成されたモーツアルトの第1番である。これは、室内楽で主にヴィオラを弾いたモーツアルトが、ピアノ三重奏に自らの楽器を加えるべく発想したともいわれている。いずれにせよ、天才の「宿命の調」短調で書かれたこの曲は、翌年作の第2番と合わせて、同形態初のスタンダード作品となった（コンクールの1次予選の課題曲でもあった）。

ところが、奇しくも同時期にピアノ四重奏曲を発売した人物がいた。まだ生地ボンに暮らす14歳のペーターヴェンである。彼は、モーツアルトの第1番と同じ1785年に、3曲のピアノ四重奏曲（WoO36）を作曲

に入った1760年頃、ハイドンが現在「ピアノ三重奏曲」として演奏される最初の作品を生み出した。ただし彼が残した約45曲の内、前半はチェンバロ用に書かれており、ピアノが意識されているのは、コンクールの1次予選の課題曲となっていた第24〜26番のグループから。これらは1788年頃の作なので、ピアノ音楽が本格化した初期と合致する。次いでモーツアルトが6曲を完成。この内の5曲（やはり1次予選の課題曲）も1786〜88年に書かれている。

こうした初期作品の位置付けは「ヴァイオリンとチェロを伴うピアノ・ソナタ」だった。家庭での音楽愛好家が主な対象で、主役のピアノをヴァイオリンとチェロが助奏する形だ。しかし多くが円熟期の所産であるハイドン、モーツアルトの作品は、音楽的な充実度の高さゆえに、「ピアノ三重奏」のレパートリーとなっていた。

音が弱く、打音後すぐに減衰するピアノと、流麗で音を保持できる弦楽器の共生は至難……当時はかような事情もあったであろう。そこに風穴を開けたのが、ピアノの進化の恩恵を受けたペーターヴェンだ。自ら作品番号を記した史上初の大作家たる彼が「作

した。しかもこれらはモーツアルト作品の少し前に書かれた可能性が高い。ただし才気漲る佳品ながらも演奏機会が少なく、彼のピアノ四重奏曲では、ウィーン移住後に書かれたピアノと管楽器の五重奏曲作品16の自身による編曲作が代表格となっている（これも1次予選の課題曲）。

その後は、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームス、フォーレといった室内楽の大家が珠玉の名品を残し、20世紀以降も様々な作品が誕生。中でもブラームスの3曲は人気が高く、コンクール本選の課題曲にもなっていた。

ピアノ四重奏は、独特の融和性もたらす絶妙な美感を有し、ソリストティックなピアノと一群で動く弦楽器3本の対比や交替の妙と、4つの楽器の緊密性、すなわち協奏曲と弦楽四重奏曲の特性を兼ね備えてもいる。現代の稀少な常設グループ、フォーレ四重奏団にインタビュールした際、彼らはその魅力をこう語っていた。「全員がメインの立場で演奏できること」、「カラーの異なる4種類の楽器がミックスされた独特の音」、「緻密な音と同時に、オーケストラのような大きな音を作り出せること」。ピアノ四重奏は多彩な魅力に溢れている。

品1」に選んだのが、他ならぬピアノ三重奏曲。1次予選の課題曲になっていた第1〜3番の3曲である。1795年に出版された3曲は、3楽器が対等に位置した堂々たる大作であり、さらに彼は1811年、同形態の代表作「第7番」大公（本選の課題曲）で1つの頂点を極めた。

その後は、シューベルト、メンデルスゾーン、ブラームス、ドヴォルザーク、ラヴェルほか多数の作曲家がロマンティックな名曲を生み出し、ロシアでは、チャイコフスキー、アレクサンダー・ラフマニノフ、ショスタコーヴィチが皆、恩人や友人を追悼する際にピアノ三重奏曲を作曲した。中でもチャイコフスキーの「偉大なる芸術家の思い出」には、超重要レパートリーとなつている。こうした歴史は20世紀以降も継続され、いわゆる現代曲もピアノ三重奏のレパートリーで重要な位置を占めている。

ピアノ三重奏は、3台の独奏楽器的な対置とそれがもたらすソロの妙技、3つの楽器が融合したまとまりの良い響き、3種類の楽器の多様な絡み合い等が魅力。その特性からソリストが集うケースが多く、1930〜40年代のルービンシュタイン（ピアノ）、ハイ



Q アイズリ・カルテットの特徴、魅力は？

A 私たちアイズリ・カルテットは、ベートーヴェンやハイ
ドンなど、弦楽四重奏に欠かせない古典音楽と、現在作
曲されている音楽を、同じプログラムの中で組み合わせ
ることによって、お互いの曲の個性をより活かすことが
できていると思っています。こうして、過去と未来の音楽の両方
をみなさまにお伝えしていくことを大切にしています。

リハーサルの時には、カルテットの名前の由来の「藍
摺り絵」のように、かなり細かい点までこだわって話し合
います。クレッシェンドをどこまで大きくするか、このpは、
遠くから聞こえてくるのか、それともこそこそ話のような
音なのか、などと相談しながら練習していると、あつと言
う間に3時間ぐらいいってしまいます。

こうして細かいことを探ることによって、作曲家が昔か
ら良く知っている友人のように思えてきます。そんな風
に感じながら演奏することが、私たちは好きです。

Q ヴィオラ奏者ならではの音楽の聴き方の特徴は？

A メロディだけでなく、音の中身がどうやって動いて
いるのか、ハーモニーやリズムがどうやってメロディをより
活かしているのかを感じながら聴きます。そこが一番お
もしろいところだと思います。

Q ヴィオラ奏者ならではの性格は？

A みなさん違って個性があると思いますが、今までお会
いしてきた「ヴィオラを弾きたい!」と思われる方は、誠
実で協調性があり、ヴィオラとヴィオラの曲への愛に溢
れていると思います。
良い人=ヴィオラ奏者(笑)!

Q 弦楽四重奏におけるヴィオラの役割とはどのようなもの？

A 基本的にヴィオラの役割は、音とハーモニーを内側から
サポートすることだと言われています。しかし楽曲によっては、
リズム、ソロ、あるいはベースの役割を果たすこともあります。
だからこそ、自分がその曲のストーリーの中でどんなキャラク
ターになれるのか、常に考えることが楽しいです!

Q ヴィオラが活躍するお気に入りの作品はありますか？

A 私が最近ハマっている曲を紹介させてください。

- エレノア・アルベルガ：弦楽四重奏曲第1番
- 望月 京：《Terres Rouges》弦楽四重奏のための
- ポール・ヴィアニコ：American Haiku
- ジャッド・グリーンスタイン：K' Zohar Harakia
- ロベルト・シューマン：弦楽四重奏曲第1番
- 武満 徹：鳥が道に降りてきた

Q これらの作品を通じて感じるヴィオラの魅力とは？

A やはりなんといっても音
の幅の広さだと思います!た
えばポール・ヴィアニコの
「アメリカン俳句」ではヴァ
イオリンに負けない音の
高さを活用しますし、アルベ
ルガやシューマンの曲では、
チェロに負けない低い堂々
としたヴィオラの特徴が生
かされます。いつも、今日は
どんなキャラクターになりき
るんだろうと思いつかべるこ
とが、最高に楽しいです。



右ノポール・ヴィアニコさん

Q 日常生活におけるヴィオラ奏者ならではの「あるある」は？

A そうですね、ヴィオラあるある……一番多いのは、ヴィオラ
のケースを見て「ヴァイオリンを弾くのですか?」と尋ねられる
ことでしょうか。そして「いいえ、私はヴィオラを弾きます」と答
えると「ヴィオラってなんですか?」と聞かれます。
ですから私は、ヴィオラのこと、ヴィオラの魅力をもっとみ
なさんに知っていただきたいと願っています。

Aizuri Quartet Ayane Kozasa (Viola)



アイズリ・カルテット 小笹文音さん (ヴィオラ)

Profile

小笹文音 (ヴィオラ)

東京都港区出身、クレーブランド音楽院、カーティス音楽院及びドイツ
クロンベルグアカデミー卒業。2011年プリムローズ国際ヴィオラコン
クール優勝。2011年から4年間フィラデルフィア室内管弦楽団の首席
奏者を務める。2019年オルフェウス室内管弦楽団アジアツアーでは
辻井伸行氏と共にサントリーホールはじめ、アジア各地で共演した。マル
ボロ音楽祭や、東京及び小樽のヴィオラスペースにも参加し、ヴィオラと
室内楽の委嘱作品を数多く演奏するなど、ヴィオラ音楽の普及に積極的
に取り組んでいる。また、子供達への音楽アニメーションプログラム「アイ
ズリキッズ」の制作にも力を入れている。

Aizuri Quartet www.aizuriquartet.com
Ayane Kozasa www.ayanekozasa.com
Ayane & Paul www.ayaneandpaul.com

室内楽奏者 あるある

室内楽に登場するさまざまな楽器の奏者には、
その楽器ならではのキャラクター、アンサンブル内での役割、
よく起きる出来事がある!?



アイズリ・カルテット
2017年第9回大阪国際室内楽コンクール優勝



弦楽器工房 リユータリア-タカダ Liuteria-TAKADA



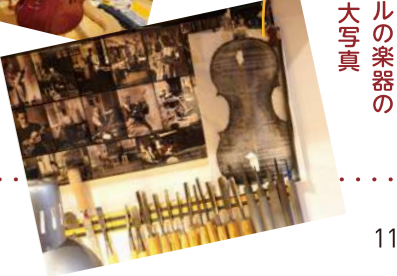
室内楽の代表的な楽器といえば、弦楽器。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ。室内楽はもちろんのこと、オーケストラにも、そしてソロでも、クラシック音楽には欠かせない楽器たちだ。楽器を弾いているのは見たことはあるけれど、何だか自分には遠い存在。どうやって作られているのだろう? 私たちにも買えるもの? メンテナンスって? そんな疑問がいっぱい編集部まること、普段はグランプリ・コンサートを担当しているやなぎは、京都の弦楽器工房Liuteria-TAKADAを訪ねて、弦楽器のことをイロイロ聞いてみました!

株式会社Liuteria-TAKADA 京都市中京区西ノ京月光町1-23



オーナーの高田です。

京都の閑静な住宅街にある、弦楽器工房Liuteria-TAKADA。チャイムを押すと、優しい笑顔がステキなオーナーの高田さんが工房に招き入れてくださいました。入ってみると、たくさんのヴァイオリンが! (当たり前!) 弦楽器を弾くアーティストとはいっぱい関わりはあるけれど、その裏のことはそんなに知らない、まるこ(やなぎ)と、さあ、さっそく、弦楽器製作のイロイロを質問しちゃいましょう!



モデルの楽器の原寸大写真

弦楽器の縁の下の力持ちは、虫! 「コンチュウ」ってなんだろう?

まずは楽器を作っているところを見学させてもらった。楽器の形は、すでにある楽器の原寸大写真から書き起こしているそう。豆鮫などの道具を使って材料の木から削り出す。
高田さん 堅い木であるかえと、柔らかい木であるもみの木を組み合わせて作っています。日本の楓とは種類が違つので、材料はすべて輸入なんです。
ヴァイオリンは約18種の部品を組み立てて作られている。その多くは、動物の皮や骨からとった天然の「かわ」を使用し取り付けている。
高田さん 弦楽器は木やにかわ、ニス



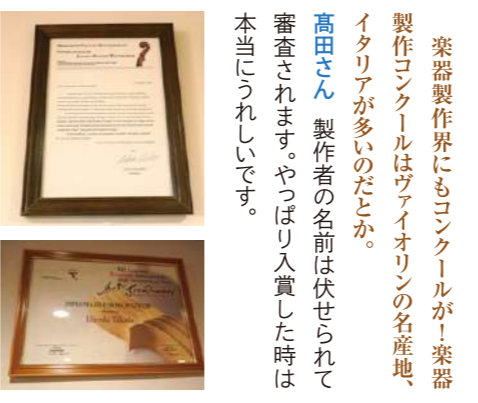
6 魂柱

なども天然のものでつくられています。だから湿気にとっても弱い。
まるこ 例えば秋、沖繩公演の次の日に北海道公演というツアーがあったら...?
高田さん 楽器にとつては、とても厳しい環境です。せめて、本州で途中に公演を...
今後ツアーを組むときは、肝に銘じます!
まるこ たくさんの部品を使っている弦楽器ですが、美しい音を出すための要はなんですか?
高田さん 色々ありますが、ひとつは「コンチュウ」だと思います。

この魂柱の立てるのも、楽器職人の腕の見せ所。位置が0.1mm変わるだけでも音の響きが変わってしまうという、シビアさだ。
やなぎ コンクール&フェスタの期間中も、たまーに弦楽器奏者が「サウンドバー(魂柱)が外れちゃった! 直せる人紹介してー!」ということもあつたな。
高田さん ありがたいことに、調整のために、大学進学後も遠方から通ってきてくれる方もたくさんいらっしゃいます。

弦楽器製作者になったキッカケ

きっかけはギターを作ってたから!?
高田さん 元々ヴァイオリンを弾いたことはなかったそう。弦楽器製作者の道に進むきっかけは...
高田さん 元々演奏経験のあるギターを作ってみてみたんです。色々な人に相談する中でヴァイオリンを作る学校があることを知り、決断。18歳の時大阪の弦楽器製作学校に入学、キャリアがスタートした。
キャリアアップは、楽器製作コンクールに入賞すること!
高田さん は27歳のときに独立して、この工房を始めたそう。
高田さん 弦楽器製作者のキャリアの指標の一つに、楽器製作コンクールの入賞というのがあります。26歳の時に初めて出したコンクールで入賞した時、師匠に「独立してはどうか?」と言われたのがきっかけです。



楽器っておもしろいところあるよね...ねえ?

先ほど魂柱を立てていた楽器、ニコラ・ガリアーノという製作者が作ったオールド楽器だそう。
ここは大阪人やなぎ、ストリートに「この楽器、なんぼ位するんでしょうか?」と聞いてみれば...
高田さん これ、5000万円くらい。
まるこ やなぎ エー...!?
近付くのがこわくなりました。高田さん、早く言ってくださいよ!!! 汗
ちなみに、かの有名なストラディヴァリウスは20億円するものもあるのだとか。この金額は楽器としての価値というよりは、骨董品としての価値。高田さんも過去に扱ったことはあるとのこと。
高田さん 無人で置いておくのが怖くて、工房に泊まりました。
楽器の値段は、産地や、材質、年代によつてさまざまである。高田さんが製作した楽器の場合、約100万円で販売しているという。ほかの楽器修理もやっていることもあり、年間1-2本の製作が限度とのこと。そう考えるとむしろ安いのではないかい!?



子どもこそ、いい楽器を持った方がいいやなぎ 楽器を始めるとき、どんな楽器を持つのがいいんでしょうか? 初めだから、とりあえず安いやつがいいかな?
高田さん 楽器の良し悪しで、上達速

度は変わってきます。だからこそ、いい楽器を持った方がいい。
とはいえ、小さい子は分数楽器(大人用の1/16、1/8、1/4、1/2、3/4のサイズがある)を使うので、成長とともにサイズが変わっていくのだから。
高田さん 毎回良いものを買って替えていくと、経済的負担が大きい。でも、いい楽器を使つてほしい。そんな思いからうちの工房では子ども用楽器を購入価格の4分の1でレンタルしています。
お子さまの楽器をお考えの方はぜひLiuteria-TAKADAまで!
おーっと、奏に載せられるのはここまで。ここに書いた以外にも、おもしろいお話がいっぱいあるのに! ということでYouTubeチャンネル作つて載せようかな。
高田さん、お忙しいところありがとうございました!



世界の音楽において、息のあったアンサンブルは
どんなふうにも生み出されるのか。スペシャリストに聞く!



モスクワ・クアルテット／左より 鍵盤グース、ドムラ、バラライカ、ピアノ



Profile

シベリアの町、オムスク生まれ。幼少の時マンドリンを習い、のちにロシアが誇る民族楽器「3弦ドムラ」に転向。1972年、モスクワの第1回民族楽器国際コンクールで優勝。オシポフ国立アカデミー民族楽器オーケストラのソロ奏者である。一方、ドムラのための作曲を多数行い、その革新的な曲は、若手ドムラ演奏家のスタンダードとして定着し、意欲的な若手演奏家により積極的に演奏されている。2008年第6回大阪国際室内楽フェスタにモスクワ・クアルテットとして出場し、メニューイン金賞およびフォークロア特別賞を受賞。アメリカ、スウェーデン、ノルウェー、日本など外国での演奏活動とアマチュアのドムラ奏者のためのマスタークラス開催にも熱心である。ロシア国内では「ドムラキング」と言われている。



〈ドムラ奏者〉アレクサンドル・ツィガンコフさん

ロシアの民族楽器ドムラの第一人者で、「ドムラの王」と呼ばれるアレクサンドル・ツィガンコフさん。2008年にモスクワ・クアルテットとして、第6回大阪国際室内楽コンクール&フェスタでメニューイン金賞、フォークロア特別賞を受賞した。そのレパートリーは、ロシアの民族音楽はもちろん、クラシックの作品の編曲ものなど幅広い。

聞き手 高坂はる香(音楽ライター)



主にメロディを担う楽器、ドムラ

ドムラとはどんな歴史を持つ楽器ですか？

旧来のドムラはとて古く、16世紀ごろロシアに広まりました。しかし17世紀半ば、ロマノフ王朝のアレクセイ・ミハイロヴィチが、ドムラで奏される音楽は不道徳だとして徹底的に排除。一度は消えてしまい、バラライカにとつてかわられました。しかし19世紀後半、ロシア民族楽器オーケストラの祖ワシーリー・アンドレーエフが、ドムラを再創造。バラライカと共存させる形で、クラシックでもフォークロアでもない、この楽器ならではの音楽を確立したのでした。

アンサンブルにおける役割は？

ドムラはメロディを担うことが多い楽器です。例えばトレモロはドムラならではのユニークな表現を可能にする奏法で、テンポがゆっくりで歌うメロディの表現が必要ときに用いられます。トレモロ奏法において大事なものは、ピックで弦を上下にはじくときの音の運び。単に速く弾けばいいのではなく、上下の動きで鳴らす音が互いを邪魔しないよう、正しい形で演奏する必要があります。一方、バラライカもメロディを担うことがあり、こちらはピックを使わずピブラートをかけることで美しい歌を表現します。モスクワ・クアルテットのヴァレリーはすばらしい技術の持ち主。ドムラのトレモロ、バラライカのピブ

ライトは、それぞれ表現に棲み分けがあり、これらがあわさることでアンサンブルの魅力が生まれます。クアルテットの他の楽器もご紹介しましょう。私の妻インナが演奏しているのは、鍵盤グース。テーパーのような形の楽器です。たづぷりした美しい響きを持ち、アンサンブルのハーモニーを豊かにします。

4つ目の楽器は、ヴァレリーの妻ラリーサが担当しているピアノ。ハンマーで弦を叩いて音を出すピアノとドムラは、音の出方、立ち上がり方が似ているので、よく一緒に演奏されます。アンサンブルにピアノが入ることでアレンジの扉が開かれ、さまざまなレパートリーを演奏することが可能になりました。

良いアンサンブルの秘訣とは

モスクワ・クアルテットは、各奏者にエネルギーと個性があり、それによって一体化している、アンサンブルのお手本のようなです。

それぞれのキャラクターがあり調和していることは、良いアンサンブルの基本です。全員が、優れたスキルはもちろん、作品のスタイルや文化への知識を持つている必要があります。ソロパートでは音楽を引っ張り、それ以外は伴奏に回るといように、役割を柔軟に変える能力も求められます。

クラシック、民族音楽と両方のレパートリーを演奏されますが、それぞれのアンサンブルでコミュニケーション方法に違いはあるのでしょうか？

基本的には同じです。民族楽器の教育でもクラシック同様、記譜法、音楽理論、演奏の伝統を学びます。モスクワ・クアルテットがクラシック作品を演奏するとき、アプローチは一般的なクラシック奏者たちとほぼ同じです。その作品が演奏されるべきスタイルに沿って演奏します。民族音楽作品の場合には、ここに

本番よければ、全てよし！

モスクワ・クアルテットは二組のご夫婦によるアンサンブルです。普通の仲間同士のアンサンブルよりもコミュニケーションがうまくいきますか？

夫婦同士も親しい友達なので、まさに家族の感覚でいられますね。民主的にそれぞれが意見を言いますし、各奏者にスポットライトがあるようにしています。実はコンクールの時、ファイナル前のリハーサルで、曲のテンポについてお互いに納得できない部分がありました。しかも話し合いは物別れに終わり、そのまま舞台上に立ちました。でも本番がうまくいったので、終わった頃にはみんなそんなことは忘れていました(笑)。

逆に、普段の生活でケンカをしたらステージに影響しますか？

私たち夫婦はケンカをすることがほとんどないから、大丈夫です！

全員クネーシン音楽学校で勉強されていますが、やはり同じ教育を共有していることは良い影響をもたらしていますか？

それは大きいですね。創設者のグネーシナによって確立された音楽へのアプローチ、音楽はどうあるべきかという考えを全員が理解しています。プロの演奏家には確実性が求められ、ミスは許されないうこと、ヴィルトウオーゾでなくてはならないということが、私たちの共通の認識です。加えて大切なのは、異なるスタイルを理解していること。パツハ、モーツァルト、ショスタコーヴィチは、それぞれのスタイルで演奏されなくてははいけません。

最後にドムラの王として、日本のロシア民族楽器ファンにメッセージを願っています！

日本の聴衆はともあまたかく、私たちの音楽を喜んで受け入れてくださるので、とても感謝しています。またみなさんのために演奏できる日が戻ってくることを願っています。



音の出し方

似た者同士



いつから人類が「楽器」を使い出したのか？
その探求はまだ終わっていない。
2000万年前の旧石器時代には、すでに楽器は存在していたとも言われる。
大阪国際室内楽コンクール&フェスタに登場する多彩な楽器を奏法ごとにご紹介！

片桐卓也 (音楽ライター)

4本のマレットで、広い音域を駆ける



マリンバ Marimba

現代音楽などでもよく使われるマリンバは、木製(ローズウッドやバドックなどから作られる)の長さの違う板をピアノの鍵盤のように配置して、マレット(ばち)で叩くことによって音を出す楽器である。その起源はアフリカだが、現在の形になったのは19世紀頃の中南米グアテマラである。それが20世紀にアメリカに伝わり、反響用の管が木製の管から金属製の管に変えられ、より深く大きな響きを出せるように改良された。音域は現在では5オクターブ出せるものが主流となっている。奏者は普通2本のマレットを使うが、指の間にはさみ4本で演奏することもある。



揚琴 Youkin

「ようきん」と読む。中国の伝統的な打弦楽器で、梨の木から作った台形のボードに多数の弦(通常は144本)を張り、それを竹から作ったバチで叩いて音を出す。中国起源ではなく、実はポルトガルが大航海時代にその原型をヨーロッパから伝え、それが中国で発展したものだと言われている。同じような打弦楽器としてはサントウル(イラン)、ツィムバロム(ハンガリーなど東欧)、ハンマー・ダルシマー(北米)、ヤングム(韓国)などの楽器があり、いずれも台に張られた弦を叩いて音を出す。日本でも明・清時代の音楽を再現する時に使われ、洋琴とも呼ばれた。

澄んだ音色と、素早いバチの動きに注目

紫紺の「ムラ」に、あんなに「叩く」楽器はめずらしいから、

オーケストラに欠かせない引き締め役



ティンパニ Timpani

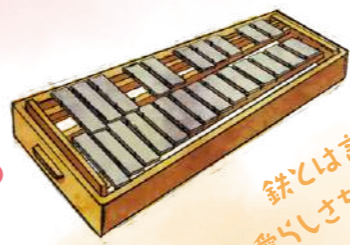
<叩く>楽器と言われて、音楽ファンが最初に思い出すのはオーケストラの一番奥に鎮座するこのティンパニではないだろうか。トルコ軍楽隊が使っていた鍋底状の打楽器ナッカーラをモデルに、その鍋底状のボディに羊の皮を張った<膜鳴楽器>としてヨーロッパの軍楽隊の中で発展し、やがてオーケストラ音楽の中に取り入れられた。ティンパニはイタリア語で、複数形(単数形はティンパノである)。昔は羊の皮を張って使っていたが、最近では樹脂製を使うことも多い。マレットもかつては木製であったが、現在は堅さの違う数種類のフェルトを使ったマレットを駆使用する。

ハンガリー音楽の
主役とも言える打弦楽器



ツィムバロム Cimbalom

ハンガリー音楽に欠かせない楽器のひとつがツィムバロムだが、広く東欧全体の音楽の中に取り入れられている打弦楽器である。コンサート・ツィムバロムと呼ばれるものは、より弦の数を増やしたプロフェッショナル仕様で、ハンガリーで使われる。これも木製の台の上に張った金属製の弦をバチで叩いて演奏する。クラシック音楽の作曲家もこれを取り入れており、コダーイの組曲「ハーリ・ヤーノシュ」などが有名だが、フランスのデュティユーなど現代の作曲家も作品の中で使用している。弦の数が多く、調弦も複雑で、演奏至難の楽器でもある。



鉄とは言え、可変りしさを感じる音色

鉄琴 Glockenspiel

今はどうか分からないが、私が小学生だった1960年代に鉄琴は合奏の花形であった。小学生が使う打楽器と言えばカスタネットと大太鼓だった時代の話である。鉄琴は、その名の通り、複数の長さの違う鉄の板を台に並べ、それをマレットで叩いて音を出す楽器。鉄琴・木琴を総称して<鍵盤打楽器>と呼ぶこともある。ドイツでは「グロッケンシュピール」と呼ばれるが、オーケストラで使われる鉄琴を日本ではグロッケンシュピールと呼ぶ。ちなみにグロッケンには「鐘」を意味するので、大きさの違う鐘を並べて奏でたという古い伝統から来ているのかもしれない。

チェレスタ Celesta

チャイコフスキーがそのバレエ音楽の中で使ったことにより、一躍注目を集めることになった楽器がチェレスタである。見た目は小型のオルガンのような鍵盤楽器だが、実はフェルト巻きハンマーによって、共鳴箱付きの金属の板を叩いて鳴らす楽器であるので、<打奏体鳴楽器>に分類されるという、かなり例外的な存在でもある。1886年にフランスのオルガン製作者オーギュスト・ミュステルが開発した。チャイコフスキーはこの楽器を使うにあたり「極秘」でロシアに運んだという逸話もあるが、その後、数多くのオーケストラ曲の中で使われることになった。



異世界から響く
チャーミングな音色

極東日本で独自に発展をとげた和楽器たち。その歴史と奏法に迫る。 和楽器コラム

日本のなかで「叩く」楽器と言えは、まずお祭りや盆踊りの時に集団全体の真ん中に置かれダイナミックなリズムを作り出す大太鼓(宮太鼓とも呼ばれる)が思い出されるだろう。実は様々な大きさのものがあり、それぞれの地域で独自に発展したものも多いのだが、基本的には櫛などの樹を1本、中をくりぬいて胴を作り、その上下の部分に牛の皮を張って鉄で留めた打楽器である。

縄文時代の遺跡から太鼓が出土することもある。和太鼓の歴史は長い。その後、中国から伝わった音楽を元に発展した雅楽の世界では羯鼓(かこ)、「三」の鼓(つみ)、「大太鼓」などが使われる。「羯鼓」は台の上に太鼓を横に置き、それを両側からバチで打つ。舞楽の時に眼に入る大きな太鼓である「大太鼓」は装飾もそれぞれ意味があつて、美しい。

中世に入ると、武士階級のなかで「能」が盛んに行われた。その「能」の中で使われる打楽器と言えは「小鼓(こつづみ)」「大鼓(おつづみ)」「太鼓(たいこ)」の3種類。小鼓は最近ではお笑いコンビ「すゑひろがりず」が使っていることで、改めて注目を集めている。「鼓」はそもそもインド起源で、中国で発展しそれが日本に持ち込まれたようである。砂時計のような木製のボディの両側に皮を張り、それを紐(調へ緒)で締めて、音の高低を作り出す。手で直接叩く打楽器である。音をきちんと出せるまでにはかなりの修行が必要な楽器である。



楽器の王様とも呼ばれる身近な存在



ピアノ Piano

世界中でい最も親しまれている楽器がピアノではないだろうか？鍵盤楽器として括れば、オルガン、チェンバロ、クラヴィコードなどの仲間となるが、バロック時代の音楽に欠かせないチェンバロが弦を弾いて音を出す構造であるのに、古典派以降に発展したピアノは弦をハンマーで叩いて音を出すという決定的な違いがある。1700年頃にイタリアのクリストフォリが開発し、それがヨーロッパ各地に伝わった。ドイツではシルバーマンが1730年頃から製作を始めたと言われ、大バッハも彼の楽器を試奏したことがある。その後、シュタインなどがさらに発展させた。

■ 2020(令和2)年度 第2回理事会

開催：3月24日付の決議の省略(定款35条)/新型コロナウイルス感染拡大防止のため
承認事項：①「第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」開催中止
② 2021(令和3)年度事業計画書及び収支予算書
③ 2020(令和2)年度臨時評議員会の決議の省略による決議

■ 2020(令和2)年度 臨時評議員会

開催：3月29日付の決議の省略(定款19条)/新型コロナウイルス感染拡大防止のため
承認事項：2021(令和3)年度事業計画書及び収支予算書
報告事項：「第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」開催中止

■ 2021(令和3)年度 第1回理事会

開催：6月2日付の決議の省略(定款35条)/新型コロナウイルス感染拡大防止のため
承認事項：① 2020(令和2)年度事業報告書及び決算報告書
② 2021(令和3)年度定時評議員会の決議の省略による決議
③ 次回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」開催の件

■ 2021(令和3)年度 定時評議員会

開催：6月25日付の決議の省略(定款19条)/新型コロナウイルス感染拡大防止のため

承認事項：① 2020(令和2)年度事業報告書及び決算報告書
② 評議員1名の選任 ③理事2名の選任
新任評議員：乾 佐登司(読売テレビ)
新任理事：森崎 健志(大阪ガス) 四方 貞充(西日本旅客鉄道)
報告事項：次回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」開催について

■ 2021(令和3)年度 助成金交付予定事業

2021(令和3)年度の助成金交付事業を決定する選考委員会で厳正な審議が行われ、14件が2月15日(月)に選考されました。
①SQS Rising Star Quartets 2020 ②定期公演B～室内楽シリーズ Vol.6～10 ③訪問プログラム2021 ④東京現音計画#14～コンポーザーズセレクション6:森紀明 ⑤モーツァルト・シリーズ 神尾真由子と仲間たち ⑥月見の里室内楽アカデミー2021 ⑦武生国際音楽祭2021 ⑧spac-eコンサートシリーズ2021 ⑨クローズアップおかげさ「アンサンブル天下統一2021」 ⑩ラヴェルが幻想したワルツ あの時パンデミックをどう捉えたか(仮称) ⑪TRIO VENTUS リサイタル・ツアー ⑫サン＝サーンス没後100周年記念【イザイとサン＝サーンス】 ⑬フェルッチョ・ブゾーニの世界～弦楽室内楽編 ⑭フォーレ室内楽全曲演奏会～鼓動と憧憬～最終回「涙～たぎり～」
選考委員：
委員長／藤田 由之(指揮・評論)
委員／青澤 隆明(評論) 小野寺 昭爾(大阪フィルハーモニー協会)
横原 千史(評論) (敬称略、委員名50音順)


■ 2022(令和4)年度 助成金募集について

募集開始：2021年9月1日(水)
募集締め切り：2021年10月31日(日)
お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団事務局
電話：06-6947-2183 HP <http://www.jcmf.or.jp>

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

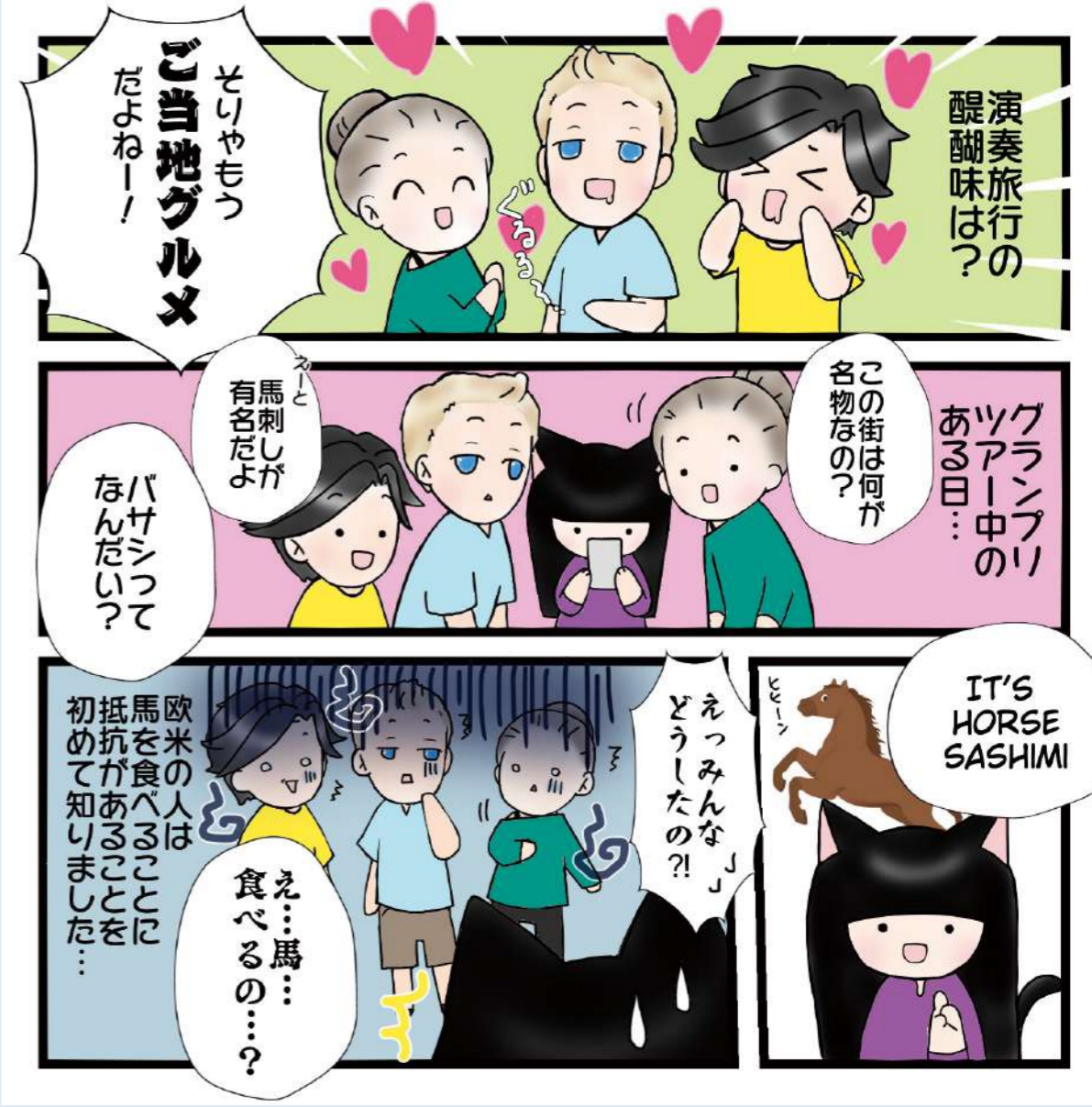
大阪ガス株式会社 関西電力株式会社	住友生命保険相互会社 大樹生命保険株式会社 東京海上日動火災保険株式会社 日本生命保険相互会社	川崎重工業株式会社 株式会社クボタ ダイキン工業株式会社 日本製鉄株式会社 日立造船株式会社 三菱重工業株式会社	非破壊検査株式会社 大塚製薬株式会社 住友化学株式会社 積水化学工業株式会社 武田薬品工業株式会社 日本ペイント株式会社	株式会社JTB 株式会社電通 株式会社ニュー・オータニ KDDI株式会社 西日本電信電話株式会社
住友電気工業株式会社 ソニーグループ株式会社 株式会社東芝 日本電気株式会社 パナソニック株式会社 株式会社日立製作所 富士通株式会社 ローム株式会社	野村證券株式会社 アサヒビール株式会社 サントリーホールディングス株式会社 ハウス食品グループ本社株式会社 東洋紡株式会社 株式会社ワコール	株式会社日建設計 株式会社大林組 鹿島建設株式会社 株式会社きんでん 株式会社鴻池組 清水建設株式会社 大成建設株式会社 大和ハウス工業株式会社 株式会社竹中工務店	近畿日本鉄道株式会社 京阪電気鉄道株式会社 南海電気鉄道株式会社 西日本旅客鉄道株式会社 阪急電鉄株式会社 阪神電気鉄道株式会社	株式会社読売新聞大阪本社 株式会社読売新聞東京本社 日本テレビ放送網株式会社 読売テレビ放送株式会社 (関連業種別 五十音順)
株式会社関西みらい銀行 株式会社みずほ銀行 株式会社三井住友銀行 三井住友信託銀行株式会社 株式会社三菱UFJ銀行 株式会社りそな銀行	伊藤忠商事株式会社 岩谷産業株式会社 株式会社千趣会 三菱商事株式会社			

今号より「奏」はリニューアルいたしました!もっと室内楽が楽しくなるマガジンとして、みなさまに室内楽の情報をお届けいたします。お手元に「奏」をはじめとした日本室内楽振興財団の情報が届く「奏メンバーズ」募集中!登録・配送料は無料です。
お申し込みは、日本室内楽振興財団ウェブサイトから! <http://www.jcmf.or.jp>



演奏旅行のたのしみ
作・絵 徳永慶子

ヴァイオリンを片手に、世界中を駆け巡るケイコさん。特に、カルテットのメンバーと一緒に日本各地を回った2011年の「グランプリ・コンサート」では、たくさんのおいしいものに出会ったとか。食を通じた異文化交流があったそうですよ(*^▽^*)



楽屋ばなし ケイコと事務局やなぎのウラ話

ケイコ やなぎ
アタックQのグランプリ・コンサートからもう10年です。よ、マンガ家のケイコさん。違います!「笑」コナのせいでマンガのオファーの方が多いいけど...10年か。月日が経つのは早いんですね。でもアナーは楽しかった!
ほとんど「お酒」の思い出しかありませんけど笑他に印象的だったことある?
チエロのアンドリューが、その頃ラーメンにハマっていて...
そういえば、最初の夜も札幌のラーメン屋で会いましたね(汗)
そうだった!アンドリューは、映画「タンポポ」を観てラーメンにハマったみたい。
波いな(笑)伊丹十三監督の売れないラーメン屋の話ね。
そう。いつもラーメンが到着したら、アンドリューがタンポポ流の作法を説明してくれるんだけど、それが「最初にまずラーメンをよく見ます。どんぶりの全容を、ラーメンの湯気を吸いこみながら、しみじみと鑑賞してください。(中略)著の先でラーメンの表面をならすというか、なでると言うか(かなり中略)箸の先で焼き豚を、愛おしむように突っつき、どんぶりの右上の位置に沈ませ、焼き豚にちよつと待ってねと声をかけて...」
いつ食べるねん!麺のびるわ!!(笑)

とくながけいこ
徳永慶子
ヴァイオリニスト
元アタック・カルテット第2ヴァイオリンとして、2011年第7回大阪国際室内楽コンクール第1部門第1位受賞、2020年グラミー賞受賞。現在はソリストとして、ニューヨークを拠点に活動。ヴァイオリニストとしての体験を綴ったイラスト・コミックを自身のInstagramで公開している。
Instagram:@keikonomanga



音楽は世界共通の コミュニケーションツールだ。



地球上の国々には、さまざまな人種・言語・文化の壁が存在します。
しかし、音楽にはそのような壁を乗り越えていく、浸透していくような
大きな力があるようです。

奏でられる美しいメロディーは、言葉が通じない人同士であっても
感動と理解を分かち合うことができます。

国際交流が活発になるなか、音楽は大切なコミュニケーション ツール。
JTBは、心の豊かにするお手伝いをいたします。